

愛知の技術・家庭科教育

(第 50 集)

も く じ

I	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
II	技術・家庭科教育における教育課程編成の重点	
1	技術教育	
(1)	技術教育における教育課程編成の重点・・・・・・・・	2
(2)	基本的な考えを受けた技術教育の授業実践・・・・・・・・	2
2	家庭科教育	
(1)	家庭科教育における教育課程編成の重点・・・・・・・・	6
(2)	基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践・・・・・・・・	6
III	第 7 2 次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題	
1	技術教育	
(1)	本年度の動向・・・・・・・・・・・・・・・・	8
(2)	レポート及び討論の内容と指導・助言・・・・・・・・	8
(3)	技術教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）・・・・・・・・	9
2	家庭科教育	
(1)	本年度の動向・・・・・・・・・・・・・・・・	9
(2)	レポート及び討論の内容と指導・助言・・・・・・・・	9
(3)	家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）・・・・・・	10
IV	終わりに・・・・・・・・・・・・・・・・	10

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会技術・家庭科部会
2022 年度 教育課程研究委員

ブロック推薦 ◎部長 ○副部長

	名古屋			尾張			三河		
	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
技術	山本 誠二	名古屋	新郊中	佐藤 祐輔	海部	七宝中	佐々木裕直	北設	東栄中
	岡嶋 浩貴	名古屋	大曽根中	日置滋比古	西春	新川中	後藤 靖智	新城	千郷中
家庭	○岡崎 亜澄	名古屋	宝小	竹内 真紀	知教連	八幡小	安藤千佳子	豊田	市木小
	阿部 純子	名古屋	沢上中	小出 めぐみ	愛知	豊明小	尾崎 里美	安城	東山中

第 68 次～第 71 次教育研究全国集会レポート提出者

68 次			69 次			71 次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
○井戸康智	名古屋	港南中	◎加藤久海	稲沢	治郎丸中	○黒柳優太	蒲郡	大塚中
○新美翔子	豊田	上郷中	◎富田かすみ	名古屋	はとり中	山田美保子	名古屋	天白中

第 72 次教育研究全国集会レポート提出者 〈技術教育〉所 良彦（一宮・萩原中）
〈家庭科教育〉伊藤 裕理奈（稲沢・稲沢北小）

I はじめに

現代社会は、国際化・情報化、価値観の多様化など、数年先も予測できないほど、急激に変化し続けている。こうした社会を生き抜くためには、どんな問題と直面しても、置かれた状況をふまえ、学んだ知識と技能を応用した解決方法を探究したり、組み合わせて活用したりして、自分で判断し問題を解決する資質・能力を身につける必要がある。このような資質・能力の育成は、学習指導要領解説技術・家庭科の目標にも「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力の育成をめざす。」と示されている。

II 技術・家庭科教育における教育課程編成の重点

1 技術教育

(1) 技術教育における教育課程編成の重点

これまでは「物事を正確に考える力」や「物事を正しく覚えられる力」、つまり計算力や記憶力が求められてきた。しかし、GIGAスクール構想による一人1台端末の導入やテクノロジーの発展により、答えがある問いに対しては、深い思考を必要としない時代となってきた。知識を増やすことが重要ではなくなりつつあり、知識や技能をどのように組み合わせて活用するかやそれらを汎用的に活用する力などが重要になってきており、「わかる」から「できる」への変容を実現していかなければならない。そのためには、知識を学ぶだけでなく、学んだ知識を「使う場所」をつくることが欠かせない。そして、「わかる」から「できる」への変容を促すためには、「失敗」の経験も不可欠である。本実践では、「わかる」から「できる」への変容をめざすことで、子どもたちが学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現を意識した教育課程編成に重点を置くことにした。

(2) 基本的な考えを受けた技術教育の授業実践

技術の目標とめざす資質・能力との結び付きを意識した実践（材料と加工の技術）

① 技術の目標とめざす資質・能力

<技術の目標>

技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造する資質・能力を次の通り育成することをめざす。

ア 生活と技術についての基礎的な理解（知識の習得だけでなく、様々な場面で活用できる概念の理解）を図るとともに、それらに係わる技能を身につけるようにする。

イ 生活や社会の中から問題を見出して課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力（学んだことを実際の生活の中で生かすことができる力、どのような問題に直面しても自分なりの判断をして解決することができる力）を養う。

ウ よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築にむけて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度（主体的に意思決定したり行動したりしようとする態度）を養う。

② めざす資質・能力の実現にむけて

一次実践（共通設計・製作）

ア 基礎的な理解にかかわる例

- ・ 設計・製作に必要な基本的な知識や技能を習得する。

イ 課題を解決する力にかかわる例

- ・ 設計・製作で直面するさまざまな問題解決にむけて、解決方法を考え、実践する。

ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例

- ・ 一次実践の過程や問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考え、気づきや学びを二次実践に生かす。

二次実践（オリジナル設計・製作）

ア 基礎的な理解に係わる例

- ・ 一次実践での知識・技能について、より詳しく、より効率的にするための方法を根拠をもって考えながら習得する。

イ 課題を解決する力に係わる例

- ・ 一次実践で考えた解決方法を実践し、よりよい方法を考え、実践したり、新たに直面する問題解決に向けて、解決方法を考えたりしながら実践する。

ウ 生活を工夫し創造しようとする実践的な態度に係わる例

- ・ 実践を振り返り、製作品や製作の過程、問題解決の結果を評価し、改善及び修正する方法を考える。
- ・ 習得した活用できる概念、生活の中で生かす力、自分なりの力で判断し解決する力をよりよい生活の実現のために生かす。

③ 一次実践授業例「あなたはどちらの材料の取り方を選ぶのか」

一次実践では共通設計の本立てを製作した(図1)。図1を製作するためには一枚の板材から三つの部品を取ることになる。材料の取り方は複数考えられるが、材料の取り方に係わる考え方等を身につけさせるために、2つの例(図2)を提示し、どちらの材料の取り方にするとよいと思うのかを考えさせた。

どちらの取り方でも製作は可能であることを知らせ、材料の取り方によって各部品の切断面数に変化があることや今後の工程でそれらを加工して組み立て、完成させるどころまで考慮するように指示をした。個々が根拠をもって材料の取り方について考えをまとめた後で2段階の意見交流活動を行い、考えを広げ深め合った。

はじめに個で考えをまとめた後、全体の傾向を確認するとそれぞれ材料の取り方を選んだ人数が半数程度ずつで、大きな差異はなかった。そこで、材料の取り方Aを選んだ生徒、材料の取り方Bを選んだ生徒どうしでグループを組み、よいと思う理由を確認し合い、新たな気づきなど、考えを広げ、深められるようにした。

次に、材料の取り方AとBを選んだ生徒2名ずつでグループを組み、それぞれがよいと思う理由を

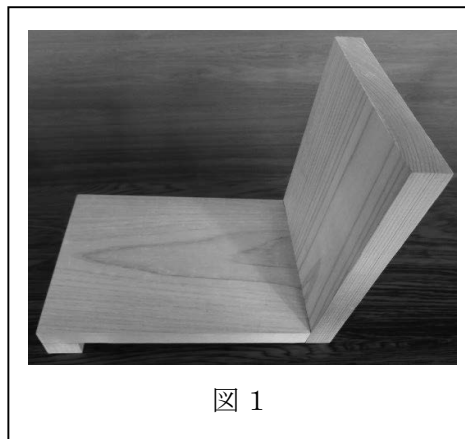
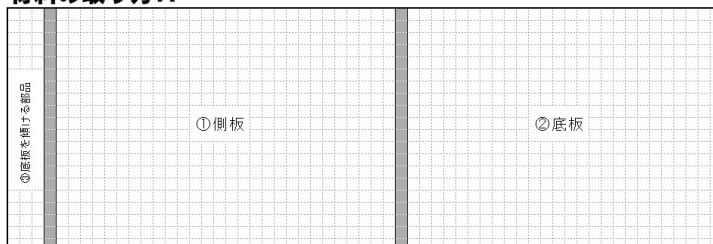


図1

材料の取り方A



材料の取り方B

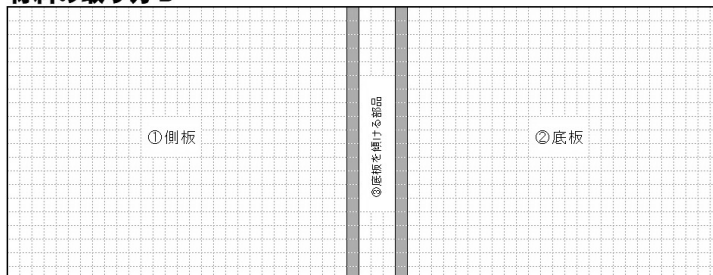


図2

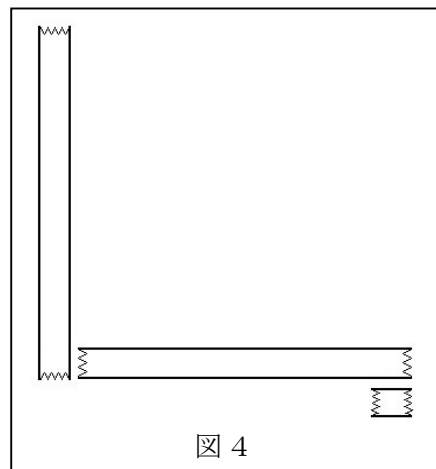
伝え合い、さらなる気づき等を得て、考えを広げ、深められるようにした。お互いに質問し合ったり、質問に答えたりしながら、完成までの見通しをもちながら自分なりの考え方で結論をまとめていく姿が見られた（図3）。

授業後の省察例
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>見た目をきれいにするために、切断面を見えないようにしたらよいと考えました。</u>側板と底板は1つの面は見えてしまい、<u>傾ける板は見えない部分が多いので傾ける板を真ん中にし、切断面が多いようにしました。</u> ・ 私は、側板を真ん中にして材料取り図を描いてしまったけど、<u>底板を傾ける部品を真ん中にして描いたほうがよいことに気付きました。</u>側板を上部分を切断面に、下の部分をきれいな面に、底板は側板とつなげるところをきれいな面に、反対側を切断面にする<u>ことで隙間ができることなく組み立てられ、傾ける部品は見えないので両端が多少がたがたになっても切断面が接着面ではないのでよいと考えました。</u>
図3

④ 一次実践授業例「部品をどのように使うとよりよい製作品になるのだろうか」

図2の材料の取り方A、Bのどちらかで製作を進め、切断、部品加工後に組み立てを行っていく。同じ形状に組み立てる場合でも、それぞれの部品の仕上がり具合は一人ひとり、さらにはすべての部品毎に違う。生徒は日常生活の中で既製品ばかりを目にしているため、寸法通りにきれいに仕上がるものだと思っている。しかし既製品と同等の正確さを実現するにはミリ単位の正確な加工が求められ、手作業での加工では正確に仕上げられない生徒も多い。そのため部品をどのような向きで使って組み立てるのかによって製作品の完成度にも大きな違いが出てくる。よりよい製作品にするために部品の加工面の仕上がり具合を考慮して、部品をどのような向きで使用して組み立てるとよいのかを考えさせた。

部品をどのような向きで使用しても組み立てることはできるが、部品の使い方によって違いがでることを知らせた。また、材料の取り方を決める際にも組み立てまでを考慮して決定していることを確認し、どのように考えていたのかがわかるようにその際の省察を振り返らせた。省察と実際の部品をそれぞれ確認し、事前に考えていた事柄が正しいのか検証するとともに、実際に仮組み立てを行いながら考えを深めさせていった。



切断面がどのような向きになるように組み立てるのかを図4に書き込ませた。図4の部品の断面の波線は切断面を表しており、書き込む

部品の使い方に関わるまとめの評価基準一覧			
A	B	C	D
切断面の状態を踏まえて、部品をどのように使うのかが、他の使い方と組み立てた時と比較して、 <u>どのような違いがあるのかを踏まえて、具体的に書かれている。</u> (比較・検討)	切断面の状態を踏まえて、部品をどのように使うのかが、他の使い方と組み立てた時と比較して書かれている。 (比較)	切断面の状態を踏まえて、部品をどのように使うのかが、 <u>簡潔な理由とともに書かれている。</u> (思考)	切断面の状態を踏まえて、部品をどのように使うのかが書かれている。 (結果)

図5

際には切断面は波線のままにし、はじめから加工されているきれいな面は波線を黒で太い直線に直すように指示をした。あわせてどのように思考した結果なのかもまとめさせた。また、評価基準として図5を事前に提示し、部品の使い方について結果だけにならないように、比較や検討をしながら根拠をもってまとめるように指示をした。

ア 材料の取り方Aを選んだ生徒の部品の使い方とまとめ例

材料の取り方Aで製作した生徒の多くが、図6のように部品を使用しようと考え、理由について図7のようにまとめていた。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板は側板に接着させるので、側板の方にきれいな面があるようにするとよいと思った。<u>もし、平らではない面が側板につくと、うまく組み立てられずにぐらぐらしてしまうのではないか</u>と思った。 ・ 側板と底板が接する面はきれいな面にする。理由は<u>側板と底板が接する面が切断面だと不安定だったので、安定するようにきれいな面にした</u>。 ・ 底板を傾ける部品は<u>右側が見える部分になる</u>ので、<u>きれいな面を右側にした方がよい</u>と思った。
<p>図 6</p>	<p>図 7</p>

イ 材料の取り方Bを選んだ生徒の部品の使い方とまとめ例

材料の取り方Bで製作した生徒の多くが、図8のように部品を使用しようと考え、理由について図9のようにまとめていた。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 側板に底板の<u>切断面をつけた時は、がたがたですき間ができてしまうけど、切断していない方をつけるとすき間ができてしつかりとついた</u>。 ・ 側板の下を切断面にしたら切断面がきれいに仕上がっておらず少し傾いてしまった。<u>側板の上部の見た目は悪いが、不安定なものになるよりはいい</u>と思った。 ・ 側板は上下を入れ替えて試してみた。切断面が下になると見た目はいいが、<u>がたがたした</u>。本立てとして使うことを考えると<u>安定している方がいい</u>と思ったので切断面が上になるようにしていきたい。
<p>図 8</p>	<p>図 9</p>

どちらの材料の取り方を選んだ生徒も、仮組立てをしながらよりよい製作品になるように部品の使い方によって起きる違いを比較・検討しながら決定する姿が見られた。また評価基準を事前に提示することで、どのように考え、まとめていくとよいのかが明確になり、比較・検討の結果をふまえて根拠をもってまとめることができるようになった。

(3) まとめ

本実践では、技術の目標とめざす資質・能力の実現をめざした。一次実践では製作に必要な知識・技能や考え方を身につけるとともに、製作を振り返り、改善及び修正する方法を考え、二次実践で生かすことで、それぞれの力をさらに高めることができるようにした。

各授業後の省察では、「〇〇のために、□□と考えた」「〇〇だから、□□にした」「〇〇だと思っていたけど、□□だということに気付いた」「〇〇だから、〇〇でよい」など、明確に根拠をもってまとめた記述が多く見られるようになった。

一次実践の材料の取り方を考える際にも材料の取り方だけでなく、その後どのような工程があるのかや完成した時の具体的なイメージをもちながら考えている記述が見られた(図3)。切断や部品加工においても、失敗を経験する中で、なぜ失敗したのか、どう改善及び修正するとよいか考えながら取り組み、まとめ、二次実践にむけて実践力を高めていく姿が見られたことで、技術の目標とめざす資質・能力の実現にむけた過程で、「わかる」から「できる」に変容

できるように実践したことで、学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びに近づけたと考える。

2 家庭科教育

(1) 家庭科教育における教育課程編成の重点

実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費・環境等についての科学的な理解を図り、それに係る技能を身につけることが、家庭科教育の基礎・基本であると考えます。

ただし、生活を取り巻く環境がめまぐるしく変化する時代では、家庭科教育を通して生活に必要な知識・技能を身につけるだけでは、社会の変化に対応することが難しい。学んだ知識・技能を生かして、変化する環境に柔軟に対応したり、持続可能な生活であるかの視点をもって生活したりする力を身につけることが必要であると考えます。

そこで、知識・技能の習得とともに、生活をよりよく営むことの意味や価値を考えること、よりよい生活の実現にむけて課題を解決し実行すること、これらが一体になって確実に働く力を育成すること。本部会では、以上のことを重点と考え、実践的・体験的な活動を入れた取り組みや主体的・対話的で深い学びの実践にむけた授業改善の取り組みを報告するなどの研究を進めた。

(2) 基本的な考えを受けた家庭科教育の授業実践

実践例『手ぬいのよさを実感！おうちの人に小物をつくろう！！』

<ねらい>

本学級の子どもは、初めての裁縫をととても楽しみにしていた。しかし、意欲はあるものの、裁縫の技能を身につけておらず、家で裁縫をしたことがある児童も少ない。

そこで、本題材では、裁縫に関する知識や技能を身につける実践的・体験的な学習を通して、自分の生活から問題点を見い出させたい。また、培った知識・技能を活用し、家庭生活に生かす方法を話し合い、深めることで、よりよい生活を工夫できるようにしたいと考えた。

<内容>

① 題材名 「手ぬいのよさを実感！おうちの人に小物をつくろう！！」

② 学習計画 9時間完了

ア 手ぬいの作品と既製品のそれぞれのよさを考えよう！…1時間

イ 裁縫道具の正しい使い方、ライフハックを学ぼう…3時間

ウ 環境にやさしく、家族が喜んでくれる作品を考えよう…1時間

エ アドバイスをもらい、作品をつくろう…3時間

オ 作品の工夫を発表しよう…1時間

(カ 家族のために作品づくりをしよう 長期休み中自宅で)

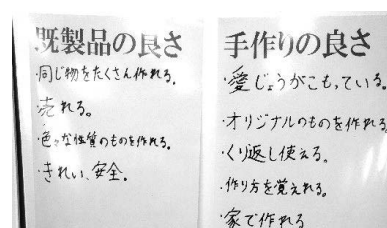
③授業の流れ

【1】裁縫を行うことの意義を話し合う

震災時に裁縫道具がとても役に立ったこと、被災者が1か所に集まり、ひと針ひと針心をこめてぞうきんなどを縫うことで、震災で傷ついた心が癒えていったエピソードを紹介することで、手ぬいのよさに気付かせた。

【2】手ぬいの作品、既製品のよさについて考える

手ぬいの作品と既製品を比べ、それぞれのよさを出し合う活動を通して、気付いたことを話し合った。「既製品は丈夫だけれど、手ぬいは、渡す相手のことを思っで作るから、ぬくもりがある」という意見があった。しかし、「自分でもこのような作品を作りたいが、裁縫の仕方がわか



らない」と発言する児童もいた。そこで、基本的な針と糸の使い方を学ぶために、保護者から学習ボランティアを募り、基本的な縫い方を教えてもらう機会を設けることにした。

【3】学習ボランティアから、裁縫のテクニックを学ぶ

保護者の学習ボランティアを講師に招き（4人グループに1人ずつのボランティア）、基本的な縫い方、裁縫の手順、裁縫道具の使い方、裁縫の楽しさなどを学んだ。また、動画で基本的な手順は見て学んだが、初めは苦戦している児童が多かった。毎回糸が抜けてしまう児童には2本どりをすすめてくれたり、玉止めをしようとしたとき糸が短くてできないときの対処法、玉止めの結び目と縫い終わりが離れてしまったときの対処法など、裁縫をする上で便利なライフハックを教えていただいたりした。個別で丁寧に教えてもらえることにより、どの児童も玉結び・玉止めなど最初の難関である技能を、あきらめず楽しそうに習得することができた。



【4】誰に、何をプレゼントしたいのかを考え、設計図を作る

手作りのよさを学び、裁縫の基本的な技術を身につけた児童は、だれにどんなものをプレゼントしたいのかを考え、家族や友達に喜んでもらえそうな作品を考えました。

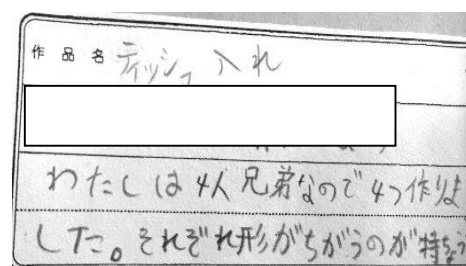
【5】作品づくりを行う



それぞれが違う作品づくりになるため、一人の教師ではフォローできないが、ここでも多くの学習ボランティアにより、それぞれの児童に個別の支援を行うことができた。抽出児 A は、他の授業はなかなか集中できない児童であるが、生まれたばかりの姪っ子的のために、集中して作品（にぎにぎ）を3つも完成させた。さらに、家でも、甥っ子の好きな消防車のティッシュケースをつくり、渡したら喜んでくれたのでうれしかったと話していた。

【6】裁縫の技能の向上を感じる児童

多くの児童が、裁縫が得意になったと自信をもち、「家でも裁縫してみたよ」という声が聞かれた。また、家族や兄弟が喜ぶ姿を見て、家の仕事のことに関心を持ち、多くの児童が夏休み中に作品づくりや調理実習に取り組んだ。



【7】環境にやさしい被服実習を学び合う

今回は、裁縫を始めたばかりの児童が扱いやすいフェルトを使用した。家にある廃材（捨てる服の切れ端、ボタン、ファスナーなど）を活用することや、使わなくなったり汚れたりしてしまった磁石を、フェルトの中に入れて再利用する、ペットボトルキャップで針刺しをつくるなどの方法を紹介した。

【8】家族の一員として学びを生かす

これまで学んできたことを家庭で実践する課題を出した（夏季休業中）。自分から、ネッククーラーに家族への感謝の気持ちや名前をししゅうした児童もいた。

授業後の振り返りでは、「これからの生活で、糸がほつれたり、ボタンが取れたりしたときに、自分で直してみたいか」と聞くと、ほとんどの児童が「自分で直したい」と答えていた。



(3)実践のまとめ

本実践では、学習ボランティアによる丁寧な個別指導で、児童の技能が高まった。また教科書のやり方以外にも、上手にできたり簡単にできたりする方法を教えていただいた。その結果、生活に必要な知識や技能を十分に身につけることができ、より主体的に取り組む児童が増えた。本校の保護者である学習ボランティアからも、「児童や学校の様子が分かることもあり、学習ボランティアをやってよかった。これからも続けたい。」という言葉から、児童・ボランティアの双方にとってよい効果が得られることがわかった。

また、身近な生活の中から見つけた課題について、話し合い活動や学びの共有をする中で、解決方法を考えたり、必要な情報を選び取ったりして、課題解決にむけて主体的に取り組むことができた。さらに、学校での学びを生活に生かせるように家庭実践を多く取り入れることで、家庭での自分の役割に気付き、生活をよりよくしていこうと工夫する児童の成長が見られた。

Ⅲ 第72次教育研究愛知県大会の動向と今後の課題

1 技術教育

(1) 本年度の動向

「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の4つの柱立てで実践の報告や討論が行われた。技術科の目標と目指す資質・能力の実現にむけて、話し合い活動や題材を工夫することで、技術の見方・考え方を働かせさせる実践など、11本のレポートが報告された。

総括討論では、「学習に対する生徒の意欲を引き出したり、高めたりするための問題設定や提示方法の工夫」について話し合われた。

(2) レポート及び討論の内容と指導・助言

① 「材料と加工の技術」にかかわる実践について

自信をもって製作に取り組めるように大切なポイントを学級全体で共有できるようにした実践や、試作した製作物を試したり、他者の製作物と比較したりすることで問題を見だし解決できるようにした実践が報告された。

討論では、工具を用いた作業の正確性の判断基準や一人ひとりの不得意な理由を把握することの大切さについて話し合われた。また、問題解決では、構想した製作物の問題解決と生活に潜む問題解決など、問題解決の視点を明らかにすることの重要性が確認された。

② 「生物育成の技術」にかかわる実践について

よりよい作物を栽培するために品質や収量の向上をめざした実践や栽培方法や育成方法を比較しながら問題解決に取り組む実践が報告された。

討論では、「よりよい」の定義をどのようにとらえるのかや生産者と消費者の双方の視点で見方・考え方を働かせることの大切さについて意見交換された。また、地元の特産品を題材にすることで生徒の関心を高める工夫について話し合われた。

③ 「エネルギー変換の技術」にかかわる実践について

チーム学習を取り入れることで新たな視点に気付かせ、学習を深められるようにした実践が報告された。

討論では、チームで効果的に学習を深められるように生徒個々の意欲や満足度などを測定する検査結果を活用したチーム編成の工夫や、チーム内の議論の質を向上させるためのファシリテーションの工夫について話し合われた。

④ 「情報の技術」にかかわる実践について

チャットアプリの開発や自動車運転など、試行錯誤しながら課題解決に取り組むことで、よりよいプログラム作成をめざした実践や生活や社会の中から問題点を見出し、解決にむけて取

り組む実践が報告された。

討論では、実際の最先端技術を動画で紹介したり、学びを共有する時間を設けたりすることの有効性について意見交換された。

(3) 技術教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

今年度は「学習に対する生徒の意欲を引き出したり、高めたりするための問題設定や提示方法の工夫」について討論を行った。生物育成では多様な種類の土や肥料を準備し、自由に配合を工夫させるなど、生徒の主体的な学習を促す場面を大切にする必要があるという意見が出された。また、導入で最先端の技術等を紹介したり、身近な生活に密接に関わる事柄と関連させたりすることが、生徒の意欲を高めることにつながるという意見が出された。

助言者からは、身近なものを教材にすると、子どもの実生活に学びが生きてくるという助言を得た。

2 家庭科教育

(1) 本年度の動向

ICT機器を利用した実践や、SDGsと関連させた実践が多くみられた。また、自らの生活を工夫するために、課題設定や振り返りの場を取り入れた実践が報告された。提出された11本のレポートを、「持続可能な社会の構築と実生活の関連」「実生活における課題解決」「ICT機器の活用」という3つの柱立てで実践の報告と討論が行われた。

総括討論では、「限られた時間数の中で、効率的に子どもたちの学びを引き出すための工夫」、「授業内の活動を通して、「何を学ぶか」を明確にする方法」「持続可能な社会の実現にむけて、自分たちの生活や現代社会の問題を考える視点をもたせる方法」について話し合いが行われた。「周りで起きていることをいかに自分事としてとらえていくか、そのためには、身近なものから教材を見付けていくことが大切」「限られた時間数で、他教科と関連させたり、実生活に取り入れたりすることで、自分たちが行動できる力を身につけさせていくことが大切」などの意見が交わされた。

(2) リポート及び討論の内容と指導・助言

子どもたちが自ら課題をもち、解決していくために、さまざまな導入の工夫がされた実践が報告された。

① 「持続可能な社会の構築と実生活を関連させた実践について

衣生活（2本）では、ファストファッションがどのようにつくられているのかを映像で理解した後、持続可能な衣生活を実現するために、自分にできることは何かを考えさせていた。消費生活と環境では、自分の買い物や生活の仕方を振り返って課題を見つけ、目に見える価値だけでなく、環境への影響や安全性にも目を向けさせ、自分自身の生活に生かすようにさせていた。保育では、幼児へのおもちゃをつくることを通して、自らも地域の一員として積極的に活動することを考えさせていた。

② 実生活における課題解決に取り組む実践

住生活（2本）では、実際に日光や加湿の影響を実験で確かめたり、ペットボトルを使った重ね着の実験をしたりすることで、課題を解決する達成感を味わい、これからも生活を工夫しようとする姿が見られた。食生活では、よくない朝食の写真や調理実習から課題を見つけ、よい朝食について考えを深め、家族が喜んでくれるおうちごはんのレシピを考えることができた。

③ ICT機器を活用した実践

食生活では、これからの自分に必要な栄養素や食材を調べ、弁当を作る学習の中で表計算ソフトを活用し、身長を入力すると必要なエネルギー量を求めることができるようにした。衣生活では、洗濯が必要な理由について、実際に体験して理解したことを、ICT機器を使用し、文字だけでなく図を使って「体操服お手入れマニュアル」としてまとめた。

助言者からは①実生活に生かすこと、体験して学ぶことができることよい。また、習慣化するまで声をかけることも大切②無意識を意識化していくことが大切③「エンカル消費」など、今一番話題になっていることを、教師が知らないといけない④不易と流行をなくしてはいけない⑤プログラミング的思考、つまり段取り力を身につける⑥何を学ぶのか授業のゴールを授業者も児童もわかっている必要があり、そのためにはルーブリック評価が大切である、などのお話をいただいた。

(3) 家庭科教育としての「ゆたかな学び」を考える（総括討論）

① 限られた時間数の中で、効率的に子どもたちの学びを引き出すための工夫

I C T機器を活用するとよいという意見が多く出された。実践のまとめをタブレットのテンプレートなどを活用するとまとめることが苦手な児童も抵抗なくできる。タブレット上で共有すれば、閲覧もできる。また、技能の習得のために動画を視聴することも効率的である。思考を伴うものについては、思考を補助するツールを活用することで効率よく思考できる。ただし、物として残すべきものやじっくり取り組むべきことなどを見失わないように見極めることが大切である。

② 活動を通して、「何を学ぶか」を明確にする方法

子どもたちがやってみたい、考えてみたいという気持ちを引き出す導入を考え、教師主導にならない工夫が必要である。調理やボタン付けができるようになるなどの活動が目的にならないように、学習したことが未来のどんなことにつながるのかを教師が価値づけることも大切である。家庭科は学習したことを生活のどこで生かすかがわかりやすい教科なので、今まで学習した単元や授業をつなげて、その時間限りにならないようにする。また、活動することが目的になってしまわないように、確かな評価規準を設定するとよい。

③ 持続可能な社会の実現にむけて、自分たちの生活や現代社会の問題を考える視点をもたせる方法

子どもたちは、衣服の製造やリサイクル・食品ロスなどは、遠い国のことや自分とはかかわりのないこととしてとらえがちである。子どもたちが見えていない部分を見せることで、自分たちも少なからずかかわっている事象がたくさんあることに気付かせることが大切である。教師が子どもたちの無意識を意識化させ、自分事としてとらえさせる必要がある。

IV 終わりに

本年度の教育研究大会は、これまで以上に子どもたちが主体となり、一人ひとりのよさや可能性を大切にされた実践が報告され、先生方の日々の努力の積み重ねを感じることができた。

第72次教育研究全国集会では、愛知の代表として、技術教育では一宮市立萩原中学校の所良彦先生に「よりよい生活の実現と持続可能な社会の構築に向け、自ら工夫し創造する生徒の育成～ミニトマトの栽培を通じた、技能の育成をめざした授業づくりを通して～」を提案していただいた。日常の管理が生育や収穫量、品質に顕著に表れる作物であるミニトマトを題材にすることで、作物の管理技術や生育環境の整備の必要性を体感させながら、生物育成の技術に関する技術を身につけさせていく実践である。肥料によって多様な成長の変化が見られる作物の様子にふれながら、育てるための知識を身につけさせていく実践的・体験的な活動を通して、収穫量や品質の向上を主体的にめざそうとする子どもの学びにむかう力の育成をめざしたものである。

家庭科教育では、稲沢市立稲沢北学校の伊藤裕理奈先生に、「自らの課題を見つけ、日常生活をよりよくしようと考え、工夫する児童の育成～充実した食生活のための学習活動の工夫を通して～」を提案していただいた。学びのステップを3段階に分けて、主体的・対話的な学習活動を行うことで、課題を自分事として主体的に追究しようとすることにつながり、自分の食生

活をよりよくする生徒を育てようとする実践である。「課題発見」「課題解決・実践活動」「評価・改善」という3つのステップをふむ中で、自らの朝食を振り返り、調理の知識や技能を身につけながら、朝食のおかずを考えるとともに、調理実習や家庭実践で生かせるよう意欲の向上や技能の高まりの育成をめざしたものである。

今後もよりいっそう充実した生活や技術に関する実践的・体験的な活動を取り入れ、子どもたち一人ひとりの思いや願いに寄り添いながら、子どもたちの現在、そして未来に生きてはたらく力を育む取り組みに期待したい。そして、子どもたちが願いをもって活動し、試行錯誤を繰り返す中で、その成果を実感できる実践が行われることを願う。

また、技術教育、家庭科教育の教育課程研究委員会においても、これまでの研究を基に教科の専門性を生かし、基礎・基本をおさえながら学ぶ喜び・わかる楽しさを味わうことができるゆたかな学びの実現をめざしていきたい。これからも子どもたちが生活や社会における事象に主体的にかかわり、未来を切り拓く力を身につけることができるように研究を進めていきたい。

なお、本誌を作成するにあたり、多くの先生方にご協力いただいたことに感謝し、今後、本誌が実践や研究の資料として活用されることを期待する。